

先だってシャンソン・フランセーズ評論家である先生が、私を目の前にして氏の生徒に「この人、放っておくとクラシックの方へ行っちゃうから、どんどん電話してください」とおっしゃった。何とも有難い言葉である。しかしここへ来て少し危ない。私はイタリア貴族の世俗歌曲・マドリガーレに傾きかけている。一時の病気かはまだ判別がつかない。けれど自分自身の中で言えることは、すこし「愛」に近づいたということだ。よく「理性が強すぎる、もっと（愛において）跳べ」と言われる私であるが、愛さえも分析的に見てしまう傾向がある。その私がマドリガーレを少し知り「あれ、女々しい男？違うな、ちょっと」「何だか愛って素敵かも」と思い始めている。フランスの力強い女や、振られて耐える男の歌に慣れているせいか逞しく生きる感覚が身に付いている私であるが、本当の男らしさってこういうところにあるのではないだろうか？と考えさせられる。世の中男女平等になってから内面・外見ともにユニセックス化している昨今、女性の美しさ・可愛さもほとんど見当たらなければ、頼れる男らしさも同様に見当たらない。男女の間は分業的寄りかかり合いが多いように思う。でも此の頃では女がそんなやり取りに疲れたのか、男も女も少し昔へ戻りつつあるような気がする。好みは草食系男子からロールキャベツ男子（外面は草食系だが内面は肉食系）へと。女は戦うのに疲れたのだろう。やはり男の逞しさに惹かれる。そこでマドリガーレの歌詞であるが「私の愛を信じてくれ」という説得的愛情表現で、押し付けも略奪もない。ま、いわばそこが貴族の気品なのだろうけれど。これをどう見るかと言えば決して女々しくないように思う。何となく女性を大事にしているような気がする。「信じていいんだよ」という包容力があるように思う。もちろん中世の社会背景が関連するが、また分析的に言ってしまうえば、脳の構造や肉体的性能の特徴からするとその方が自然だ。その自然な大きな懐が現代の男性には希少なのだ。「愛とは相手のための行動」とどこかで読んだことがあるが、「家事を手伝います」「子守をします」というのは実に実務的な愛の行動だ。だがここで私は一組の夫婦を思い出す。妻はパティシエール。「やりたいのならやってみれば」と自然に受け止め協力する夫。外面ソフトな彼もロールキャベツ男子だと思う。妻も可愛さを失っていない。素敵なお夫婦だと思う。おかげで私はおいしいケーキが食べられて嬉しいけれど、それだけではない。その二人の間にある「信頼」が菓子の味や店の雰囲気にも現れて幸福感を振りまく。マドリガーレの詩で扱われている「愛の信頼」も、同じように聴き手に逆説的に幸福感を共有させる。厭世的ではあるが愛自体の美しさを感じさせる。

というわけで、私は思う。フランス語の単語が多少わかるお蔭で、同じラテン系のイタリア語もスペルを見て意味が想像できるものも少なくない。「もしかして私、イタリア語を理解するためにフランス語に触れていた？」と妙な思いが頭に浮かぶ。「こら！シャンソン・フランセーズはどうなる？戻ってこい」と誰か言ってくれるかな？ただ少なくとも言えることは、今の私にとってイタリアの歌の歌詞の方が「愛への道」を開いてくれる。大理石並みの理性が軽石までにならないとしても。愛を思うとき私の心には何故かサンジミニャーノの豊かな自然を背景に洗濯物を干しに出てきた主婦の姿が浮かんでくる。何故か観光客と外れた行動をとる私は日常の人の姿に潜む愛を発見する。貴族でなくても愛の歌は人間の心の中で豊かに歌われていると。(2012.9.19)